

絵本三昧

(3) 絵本の使い手の視点から

宮地 敏子

前回、絵本を読み合うことは喜びの共同体験だと書いたが、その喜びは私は格別に多くいただいたわけではないかと思う。保育者養成の短大において、二十歳前後の学生を対象に、絵本を授業に使ってきた。絵本は優れた教材であり、そのうえ読み合うことで学生から多くの学びを与えられてきた。

第一に「考える」きっかけ、未知への扉を開ける動機づけとなった。子どもの人権についての学習に、『あなたがもし奴隷だったら…』（レスタージュリアス・文、ロッド・ブラウン絵、片岡しのぶ訳、あすなる書房）から、鎖でつないだ黒人を、肩と肩が触れるような狭い棚にびっしり並べて輸送する絵をコピーし、そのなかの一人になっ

たつもりで、隣の人間との会話や独り言を書かせた。上からの糞尿が垂れてきても身動きできない悲惨さに思いを馳せ、みな真剣だった。自分のことばで、怒り、あきらめ、無感動、哀しみ、故郷の思い出などいろいろな独白が出た。アメリカに着くまでに三分の一が死んでしまい、死体は鯨の泳ぐ海にほうり込まれるという史実に、息を飲み、黙した。娘が家族の目前で売られる他の場面も、人権を考えるきっかけになった。

異文化理解の絵本として、学生が選んできた一冊に『トゥートとパドル』（ホリー・ホビー作、三宮由紀子訳、BL出版）があった。グループ発表で、はじめに学生がクラスになげかけた質問は、「あなたは登場人物の性格でどちらに近いですか？」という質問だった。積極的に世界旅行するトゥートより、家の周りで喜びを見いだすパドルに自分を重ねる学生が多かった。次に、「この

二人の友情を成り立たせているのは何でしょう？」と問い掛けた。人格を認めること、寛容さ、相互の尊敬、自分の生き方への自信、喜びを見いだす前向きな姿勢など、学生たちは友情の成立の条件を探っていた。それは異文化理解とは何かと問うのと同じではないかと、発表者たちは考えたのである。

このように、子どもの権利条件、人権保育、異文化理解、幼年童話と絵本の比較など、いろいろなテーマについて考えるきっかけづくりに、絵本を使用してきた。

第二に、絵本は彼らに自分自身を顧みる機会を与えた。

レオ・レオニの『じぶんだけのいろ』『フレデリック』『さかなはさかな』（いずれも谷川俊太郎訳、好学社）あるいはエリック・カールの『ごちやまぜカメレオン』（八木田宜子訳、ほるぷ出

版)などは、人に迎合しやすい自分に気付き、また自分を肯定的にとらえる機会を与えたようだ。絵本は登場人物の子どもを「あるがまま認め」さるなる一歩へと誘っていく。

いままでの学校生活のなかで、教師との関係で鬱屈した気持ちを抱いてきた学生には、灰谷健次郎の諸作品や、『いつもちこくのおとこのこジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー』(ジョン・バーニンガム作、谷川俊太郎訳、あかね書房)が、「聴く」ことの大切さを伝え、また子ども(過去の自分)の正当性と同時に、教師も自分と同じように弱点をもつ一人の人間であるという理解を進めたようだ。

『おおきな木』(シエル・シルヴァスタイン作絵、ほんださんいちろう訳、篠崎書林)は、恋人や家族をも巻き込んだ「愛」を考える機会になった。

THE GIVING TREEが原題で、一本のりんごの

木が一人の人間の少年から老年にいたるまで、自分のすべてを請われるままに与え尽くす物語である。『子どもとファンタジー』:絵本による子ども「自己」の発見(守屋慶子、新進社)に記載された小学校から大学まで数か国の子どもたちの感想を抜き出して資料にし、自分の感想、親の、恋人の感想などと比較検討した。りんごの木に無償の愛を感じて感動する者、少年に自分を重ねて反省する者、りんごの木の愛は自己犠牲であってほんものの愛ではないととらえる者、親を木になぞらえる者、未来がない残酷な話だという者、実にさまざまだった。絵本に触発されて、自分自身を見つめ、意見を表明し合った時間だった。



自分を愛することができなくては、子ども人間を愛することはできない。自分を信じなくては子ども人間を信じることはできない。生まれた愛には持ち主はない。こういう気付きへと、絵本は導いてくれる。

第三に、保育者をめざす学生にとって、絵本は子どもの目線を理解するのに極めて有効だ。話がそれるが、絵本が何かの「役に立つ」という発言をすると、どうも批判を浴びるようだ。かつて絵本の効果をいくつかの実例をあげ「このころのお菓」と表現したことがあったのだが、講演の後、絵本を速効の薬のようにいうのはどうかと思うと言う感想が寄せられた。しかし、絵本を伝えてきた経験からいうと、絵本は、実に豊かなもので、確実に精神性や直観を磨く役に立つ。忘れてはならないのは、それが目に見える形で計れないことだ。悲しい気持ちでいる子どものところに、ある絵本を伝えればすぐに明るくなることもあれば、

そうはならないけれど、ぬくもりとしてどこかにしまわれて、それが強さになっていくこともある。一過性の楽しい絵本もあれば、意味が深くよく理解できないけれど、いやすぐには理解できないからこそ、忘れられずに残っていく絵本もある。多くの絵本を読んでもらって、自らの「効果」にしていくのは、いつでも一人ひとりの子ども自身なのだ。「ああ、そんなこともあった」「そうそう、いまからすれば、なんであんなことになっただわったのかわからない」「この子の気持ち、小さい頃のわたしそっくり」というように、「事実」として、学生が子どもの目をもてたと思えば幼児理解に一步近付くのではないだろうか。「むかし、いちどは子どもだった」学生は、絵本によって、自分の子どものころを、鮮明に思い出す。そして、繊細な直観的な感性を、再び磨き出す。

ある学生が「先生をテーマとした絵本」を発表したとき、『いっちゃんね、おしゃべりがした

いのね』(灰谷健次郎文、長谷川集平絵、理論社)を読んだ。読み終わったときのクラスの共感に満ちた沈黙を今でも思い出す。彼女はその絵本を担任の先生からもらったという。今でいう登園拒否に近い自分が、その先生だけをよりどころに保育園に通っていたと言った。きつとキューブラー・ロスのいう子どもの「象徴言語」を解する教師だったにちがいない。大人ならなんでもないことが、子どもにとって岩のように重いと時がある。それを一緒に負うことができる教師像を、この絵本は描いている。

『いいこってどんなこ?』(ジーン・モデシット文、ロビン・スポワート絵、もきかずこ訳、富山房)は、母子関係についての授業で使用した。学生を五歳児役と母親役に分け、「いいこってどんなこ?」と子ども役が尋ねそれに対して母親はどう答えるかロールプレイをした。尋ねる側に、母

親がした答えに対し、どのように感じたかを後で聞いた。「いいこってどんなこ?」「好き嫌いなくなんでも食べる子」「いいこってどんな子?」「おともだちとなかよくできる子」「いいこってどんなこ?」「お母さんのいうことをきく子」母親役はなにかと注文をつけ、子ども役は母親の期待を重荷と感ずる者が多かった。その話し合いの後、この絵本を読んだ。「バニーはバニーらしくしていてくれるのがいちばんよ」ということばに、ほっとした表情が広がっていった。

さて、今、インドの大学で、絵本を使用する授業を中国日本研究科の講座でやり始めている。ああいうえお絵本や挨拶の絵本などに学生たちは興味津々だ。絵本がどう受け入れられるかこれからが楽しみだ。

(洗足学園短期大学・デリー大学)